

平賀洗一の映画  
「女性美3部作」  
についての反響

電子図書  
2013

六日町高等学校第7回生のネットワークより

## 平賀洗一の映画『女性美3部作』についての反響

2013年3月30日にNHK BSプレミアムの特別番組『ムカシネマ』（注：全国から集めた昔のシネマの紹介番組。2時間番組）で放映された平賀洗一が撮影した『女性美3部作』（1936～1938年）について、六日町高等学校第7回生の同期会メンバーの間のネットワークで交換されたメールを時系列順に編集しました。

編集・表紙デザイン：平賀壯太

\*\*\*\*\*  
From: keiryu@dream.jp  
Subject: [rokko7:1649] すっかり春ですね  
Date: 2013年3月17日 10:00:30:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

管理人より（注：このネットワークの管理人、飯塚友章）

壯太さんからメールがありましたので、転送します。録画予約を忘れないように、カレンダーをチェックしておきました。

先日、NHKテレビの方が2人拙宅に訪ねて来て、父が1935-1938年に撮影した9.5mmフィルムの映画について2時間程取材して行きました。3月30日午後9時からの特別番組『ムカシネマ』（NHK BSプレミアム、『昔のシネマ』の略）の取材でした。全国から集めた昔の映画を紹介する番組で、父の撮影した映画も数分間放映されるということです。平賀壯太

\*\*\*\*\*  
From: kazuya@courante.plala.or.jp  
Subject: Re: 近況  
Date: 2013年3月31日 11:12:42:JST  
To: hiraga64@grape.plala.or.jp

平賀さま

見ましたよ、「ムカシネマ」。

飯塚君が大分前にRokko7に予告していたのをすっかり忘れてしまい、昨晚6時過ぎ、今成の正子さんから電話を貰い思い出した次第。危ないところでした。そのあと27会（注：六日町中学同期会）のいつもの数人にも電話で知らせてやりました。

いつ貴兄の映像が流れるかとわくわくしながら見ておりました。流れた映像の多くが自分史や家族の記録、またはその時々珍しい風俗の記録画であった中で異色の映像であったと思います。

あらためて御父君の「他人と同じことはするな」の生き方に敬意を表します。

タカハシ（注：高橋一哉）

\*\*\*\*\*  
On 2013/03/31, at 19:48, Iiduka Tomoaki wrote:

壮太さん「ムカシネマ」見ました。インタビューも。  
戦争の足音が聞こえるような時代、あの映像を残すこと自体すごく先取的な父上だったのでですね。

管理人

\*\*\*\*\*  
From: "sota hiraga" <hiraga64@grape.plala.or.jp>  
To: <rokko7@freeml.com>  
Sent: Sunday, March 31, 2013 8:16 PM  
Subject: [rokko7:1662]

管理人様

昨夜は京都大学ウイルス研究所のOB達の飲み会がありましたので、ムカシネマは録画しておき、先程鑑賞いたしました。

父の撮影したフィルムは短時間の放映でしたが、要領良くまとめてありました。2時間の取材のときに下記のように私が要点としてまとめて話したことが皆含まれていました。

1. 当時の日本は戦時色一色であったこと。当時この撮影が世間にばれたら「非国民」と言われかねない時代であった。
2. 女体の健康美を賛美する前衛的な作品であり、ポルノ的な要素はない。
3. 妻に内緒に撮影を行ったのではなく、妻は良き協力者であった。
4. 撮影者本人はオリジナリティのある芸術作品だと自負していたに違いない（当時、映像を公開することはできなかったが）。
5. 75年後の今、やっとNHKで放映できる世の中になった。

平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: ick26473@hb.tpl.jp  
Subject: [rokko7:1663] Re: 4月壁紙カレンダー  
Date: 2013年4月1日 16:47:04:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

平賀さん

ところで、平賀さん、私もムカシネマを偶然みました。私は昔「撮り鉄」で、8ミリ撮影機をもってSL撮影にあちこちと飛び廻っていた時期がありました。それは、上野駅からSLが消え去ることを知ってから急に、これは記録に残しておきたいと思い立ち、会津若松を中心にした日中線、只見線、磐越西線、等々の終焉の日には、みな立ち会ってきました。国鉄最後の営業運転であった室蘭本線のC57135の最終日にも立ち会ってフィルムに収めて来ました。そんなわけで「ムカシネマ」の類には関心大であり、BSのその番組をみていたところあなたの父君の撮ったシネマとあなたへのインタビューをみることになったのです。

それはともかくとして、とてもおおきな関心を喚起したことは、戦時色一色であったあの時期に裸体の女性を撮影したそのことが意味することなのです。表現には、その表現にいたる思想があるはずなのです。その思想のありかはどこにあったかということです。戦前の知識人で、芸術的に前衛であった人々は、そのころ国家によって弾圧され壊滅状態にあったとはいえ、社会主義リアリズム論の系譜に属していたというのが時流でした。にもかかわらず、そうした「前衛」意識に捉われることなく独自の視点を持っていたことの根拠となる思想はいかなる思想であったのかということです。

戦後、伊藤整が芸術の本質論として「生命による秩序の批判」という論理を唱えていましたが、あの女性の輝ける裸体こそ生命の表れとして、不条理な国家的秩序に対峙していたと解釈できるならば、まさに伊藤理論を、そのときすでに実行していたということになります。しかし、伊藤理論は戦後のことですから、そのはるか以前に実現していたのですから、その思想的源流はどこにあったのかということなのです。

実は私は、私の思想の決算として、もう一度近代とは何であったのか、そして現代とは何かを、振り返って検討しているところなのです。日本的近代思想には大きく分けて西田幾多郎にはじまる京都学派の系譜と、そして東大・岩波文化といわれてきた二つの系譜がありますが、あなたの父君はいかなる系譜をおのれのなかに育んできたのかという問題を提起しているのです。もしかしたら戦前の大正教養主義の末裔まつえいかな、とも思ったりしますが、いずれにせよその根拠となるところを知りたいものです。

小林一喜

(注：田中角栄論や吉本隆明論の著作者)

(参考：小林一喜著『戦後精神における近代と超近代——田中角栄にみる“地”民主主義の立ち上げとその軌跡——』文芸社)

\*\*\*\*\*  
From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1668] ムカシネマについて  
Date: 2013年4月2日 16:29:24:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜様

先日（3月30日）に放映されたNHK BSプレミアムの特別番組『ムカシネマ』の中で父平賀洗一が1936～1938年に撮影した9.5mmフィイルムの映像『女性美3部作』を御覧になり、その作品がどのような思想を基にして制作されたのかということに御興味がおりとのこと。

父については、WB上の私のホームページ『平賀壯太のホームページ』の中に掲載しておきましたエッセイ『元昆虫少年が語る父との絆』を御覧になっていただくと人間像が少し理解できるかも知れません。  
<http://www12.plala.or.jp/s3t45h86a9g8xyz6/>

このエッセイに書いておいたように父は東北帝国大学医学部の学生時代から共産主義者であったのです。そして、1928年3月15日（いわゆる『3.15事件』）全国一斉の共産主義者や社会主義者の大量検挙のときに東北帝国大学の学生たちが作った社会主義研究会のメンバー達と共に検挙されたのです。父が共産主義に興味を持つきっかけは南魚沼郡の貧しい農家の生活を見ていたことと、当時の地主・小作人の矛盾ある封建制度に対する疑問があったためと推測されます。大学生時代は小作人争議に社会主義研究会のメンバーと共に応援に駆けつけていたそうです。そして、自分自身が経済的に苦学した学生生活をしていたこともその要因の一つだったかもしれません。戦後の父の言動から明らかなように、父は戦争前から戦争に反対の平和主義者であり、時の軍事政権や軍国主義一色の時勢をにがにがしく思っていたのです。

父は戦前から医療の傍ら、独学で油絵も描いておりました。戦後は美術雑誌に載った海外からいち早く入ってきたマチスやピカソの前衛的な絵に興味を持っていました。戦後に2枚の社会主義リアリズム的な油絵（溶鉱炉で働く労働者）を描いたことはありましたが、歳をとってからは「社会主義リアリズムは芸術の本道ではないし、前衛でもない」と思っていたのでしょう。本当に好きだったのはピカソの絵だったようで、中でもピカソの『ゲルニカ』を高く評価していました。美術史の本流を正しく理解していたのだと思います。人間味が溢れるピカソ自身の自由奔放な生涯も好きだったようです。独裁者のスターリン批判で暴かれたソ連式社会主義にも父は幻滅していました。権威的で硬直した冷たいソ連

式社会主義は父の理想とは異なるものだったのでしょう。もともとマルクス主義・共産主義は労働者を労働の搾取から解放し、自由な人間性を回復させる思想のはずだったのにソ連は国民を抑圧する国へと変貌してしまっていたのです。

終戦の日に父が私に言った「これからは自由に油絵が描ける」という言葉が強く印象に残っています。そして、父は終戦から1週間もたたないうちに油絵の道具を担いで大空襲で全焼した長岡市に戦争の惨禍を描きに行ったのでした（私のエッセイを参照）。戦争中は呑気に油絵を描いていられる社会情勢ではなかったので、父が『平和と自由』を渴望していたことがこの言葉に良く表われています。

さて、父が『女性美3部作』を作った思想的背景はなにかという御質問ですが、西田哲学や大正教養主義など関係ないでしょう。これらに関係した書物は父の蔵書の中には全くありませんでしたし、父から哲学の話など聞いたこともありませんでした。伊藤整の芸術論について私は不勉強で何も知りません。父の蔵書の中に伊藤整の著書はありませんでした。父はこのような文系的・哲学的なこととはほとんど関係ない自然科学・医学の世界の人だったので。勿論、科学者なら当然ですが、生物進化に神の力など必要としない唯物論的な『ダーウィンの進化論』や『オパーリンの生命の起源』を支持していました。したがって、既成の思想の中に父の創造的芸術活動の源を探ろうという試みは無意味だと思います。

私は、父が他の人による何かの思想の下でこの作品を作ったとは考えておりません。創造的芸術を行う力はその人間の中から沸々と自然に湧き起こって来る押さえがたい衝動の力であり、何かの既成の思想を必要とするものではないと考えております。父自身の持つ豊かで自由な人間性がこの魅力的な作品を作った原動力だと私は思っております。女性の身体を美しいと思うことは男性なら皆（ゲイの人は別かも知れませんが）が持っている人類が生物進化の過程で獲得した生物学的・根源的な性質です。そしてその気持ちを実際にオリジナリティのある作品に昇華するために必要な芸術的才能に父は恵まれていたのだと思います。高価な映画撮影機材を買う経済力や能登半島の離島「へぐら島」まで海女たちを撮影に行く実行力もあったのでしょう。そして、当時の軍国主義政権に対する『反権力的反抗心』も混じていたのではないかと推測しております。『不条理な国家体制に対峙する文化活動』と捉えることもできるでしょう。父の口癖だった『人のやらないことをやる』という強いアバンギャルド的精神がここにも表われているのだと思います。芸術や科学の世界では、オリジナリティのあるものが高く評価されるからです。アバンギャルドな文化活動は当然周りから突出した存在ですから初めは反社会的・反権威的に見えることもありますが、時が経つに連れて周りがやがてそれに追いついて、評価され、受け入れられて行くものなのでしょう。印象派以後の美術史を学ぶとそのことが良く理解できます。

2013年4月2日

平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1669] ムカシネマについて (2)  
Date: 2013年4月3日 15:30:35:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜様

「創造的な文化活動を行う原動力は個人の中にどのようにして湧き起こるのか」というメカニズムに私は興味を持っています。オリジナリティのある仕事をしたいという気持ちが湧き起こる源泉は何なのかという問題です。父について言えば、「人の真似をするな。人のしないことをしろ」ということがキーワードだったと思います。芸術や科学の世界ではオリジナリティのある創造的仕事が重要であることは分かります。しかし、世間では人と横並びになり、突出しないよう、周りから浮いてしまわないよう常に周りを見ながら生活している人が多いと思いますが、父がモットーとしたキーワードは全く逆のものでした。これを実行すれば、何事にも常に少数派でいることになり、それを厭わない強い精神が必要となります。父の生涯にはそのようなことがあちこちに見られます。

学生時代に社会主義研究会に入ったこと、そして戦後ただちに母と共に日本共産党に入党して数人で六日町支部（六日町細胞）を設立したことや、祖母の亡くなった時（1950年）に六日町で初めて家族葬を行ったことがその例です。六日町に古くから伝わる複雑な伝統の葬儀はしなかったのです。父の遺言は、自分は医者であり死後の世界など信じていないのだから、自分が死んだら戒名などは要らないし、お坊さんにお経をあげてもらい必要も無い、遺骨は単にカルシウムの塊であるから粉にして坂戸山の山頂からまけというラジカルなものでした。私は小学生の頃から、父にこういう遺言を聞かされ続けて育ったのです。

父は東北帝国大学医学部を卒業後は、大学に残って病原微生物の研究をしたいと考えていましたが、経済的にそれができる家庭環境ではなかったために北海道旭川市の病院に勤務しました。もし大学に残り研究生活をしていたら、科学上の発見というオリジナリティのある仕事ができただろうかもしれませんが、六日町での開業医としての医療行為の中ではそのようなことは無理だったでしょうから、映画撮影に独創性を発揮する突破口を見つけたのかも知れません。そして、最も生身の人間性を表現できるテーマを選び、それをあの『女性美3部作』という魅力的な作品へと昇華させたのだと思います。開業した医院の運営も順調に進み、次男も生まれ、家庭の順風満帆じゅんぷうまんぼんの高揚感の中でこの映画は撮影されたのでしょう。中国への侵略戦争が勃発して騒然とした世の中を尻目に父がこの映画を作っていたことには驚きますが、そこに当時の軍事政権に対する父の反抗心も透けて見えてきます。大量の敵味方の人が死ぬ戦争という不条理の体制に対して、生の輝きを放つこの女体の映像はまばゆいばかりの存在です。

2013年4月3日 平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: eokazaki@tatikawa.or.jp  
Subject: [rokko7:1670] こばやしvs平賀 問答を読んで  
Date: 2013年4月3日 15:49:55:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

岡崎悦夫より（注：医師）

新年度を迎え忙しい毎日ですが、ひとこと言わせてください。

平賀氏父君の映像作品がNHK/BSで放映され、ごく短い作品だがいろいろ考えさせるフィルムでした。小林一喜氏からは、困難な時代にもかかわらずこの作品を制作した思想的な基盤は何か、という質問が出ました。私は病気の成因や、どういう過程を経て特有の病変や症状が発現するかという発生病理、進展するメカニズムの研究、組織診断が専門の病理医で、社会の出来事や文化・芸術活動までも同じような見方・考え方を癖がっており、平賀洗一氏の傑出した行動の背景に関する質問や平賀壮太氏の解説をたいへん興味深く読ませて頂きました。

ところで、洗一氏の芸術活動の背景に関連して小林氏が紹介した伊藤理論や伊藤整について、その源流ないし基盤ともいえるべき問題について記してみたい。平賀氏が投げかけた『創造的な文化活動の原動力は個人の中にどのようにして湧き起こるか、そのメカニズムは？』という問題についても、画家の平山郁夫について調べたことがあるので、この機会にすこし整理してみます。アバンギャルド（既成概念にとらわれない新しい表現方法を求める芸術活動）的精神にだけ関心のある方は平山氏についての一文はスキップしてください。日本画家であり東京藝術大学長という教育者であることを意識してか、芸術家にしては珍しく、独自の画風を探求する苦悩、発想・創作の原点、制作過程の素材を公開しているのです。

伊藤整は、21歳で抒情詩集『雪明かりの路』を自費出版しデビュー、64歳胃癌で死亡。この間の多彩な活動は文壇・学会・社会から広く注目された。詩人・作家・翻訳家・文学評論家・編集者・東工大教授。近代文学館創立のビジネス交渉に才を発揮する一方「近代日本人の発想の諸形式」を、そして晩年には「日本文壇史」を発表した。

1922年パリで出版されたジョイスの「ユリシーズ」はワイセツ文書として英国・米国で発禁とされていたが、1936年になると英米両国でも刊行された。しかしそれに先駆けること5年前、伊藤整は翻訳を手がけている。つまり、伊藤は海外で高い評価を得ているという理由ではなく、自らその文学的価値を評価し翻訳刊行したのである。今になって翻訳の欠陥も指摘されているが、翻訳作業の過程で受けた影響は大きい。1931年26歳のときである。同じく「チャタレイ夫人の恋人」削除版の翻訳は1935年30歳で刊行。完全版の翻訳は1950年に出版し、“芸術かワイセツ文書か”で最高裁まで争われた。私は英語教科書として使われたエッセイの著者・ロレンスの生き方（学生として学ぶ大学の言語学教授の



3児ある6歳年上の夫人と恋に落ち国外に逃避行)に興味を持ち、後年、伊藤整の次男・伊藤礼が削除された部分を補完して訳し挿入した本を読んだ。人間と社会の根本的な問題が扱われているのだが、性の奥深さを感じるとともに、性の問題は伊藤整が自らの体験として「若い詩人の肖像」の中で語っていること<性には、文学のかなわないような人間を動かす力がある>と共通していると思った。最近、看護学校の補助教材として使った Sharon Moalem 著、実川元子訳「人はなぜSEXをするのか?—進化のための遺伝子の最新研究」2010/1 刊は、性に関する小さな最新百科全書ともいえる本で、科学者や芸術家の関心事となってきた「女体美」についても取り上げている。訳書の題名は原題”HOW SEX WORKS”の内容をよく伝えていないのが残念だ。

伊藤が50歳のとき発表した自伝的作品「若い詩人の肖像」(事実に即した内容で正確と言われ、母校の伊藤整生誕100年記念展示でも多数引用している)を読むと、伊藤の思想の源流は多感な青春期である中学・小樽高商・中学教師そして上京した頃の、体験と環境にあるのではないかと思った。彼が学生時代に傾倒した詩人イェーツにしても、胸の内の”萌芽”を刺激し育んだ成長の糧にすぎない。就寝時手帳を授業中に励まされる。自らわき出るエネルギーと、海外の新刊書がすぐ読める図書環境の恩恵はおおきかったと或る研究会で報告されている。むさぼるように読んだ本は人間性の形成と後に伊藤理論となる考え方に重要な影響をあたえたことは確かであろう。

平山郁夫は、15歳のとき広島で被爆した体験が「画業の原点」と自ら語っている。被爆後遺症である白血球減少と疲労感に悩まされた十代後半から二十代。生涯を通したテーマは「平和への祈り」。その時々テーマは「仏教伝来」そして「シルクロードの旅」など。他方、納税額6億5千万の全国長者番付トップ、国際的な文化財保護活動を続け、日本美術院理事長、文化勲章受章、東京芸大学長……。行政・政治家・財界にもつながりがあり国内外の数えきれない要職をこなした。体制側の権化という見方もあるが、実情をよく知らないまま色分けできないと思う。

子どもの頃から絵を描くのが好きで狭い路地にロウ石を使ってよく描いていたという。法学部進学を考えていたが、大伯父に「1回でいいから」と請われ東京美術学校予科を17歳で受験。クラスで最年少の美校生となる。しかし若い平山郁夫は最終学年になって自信を失い自分の能力と将来性に悩み迷う。私が、平山氏に関心を持ったのは瀬戸内生口島の瀬戸田町(現・広島県尾道市)を訪れた15年前のことである。広島県福山市における日本病院脳外科学会の講演を終えて、爽やかな秋の潮風を浴びたくて瀬戸内の島々をむすぶ「しまなみ海道」をドライブ。偶然泊った平山氏生家に近い民宿で、子どもの頃から平山氏を知る人の話に胸を揺さぶられ、平山郁夫美術館を訪ねたのがきっかけであった。他では真似のできない充実した展示内容で、驚いたのは、絵をかくことは好きだったが必ずしも画家志望ではなかった画学生が、自信を失い悩み迷う姿であった。退学届を出す寸前に見つかり、美術史の谷信一先生と交わした手紙の内容であった。青年期の identity crisis ともいえようか。私は手紙の文面に感情移入しこみあげる涙を抑え、無様な姿を家内に見られるのが嫌でトイレに駆け込んだ。

「創作の原点は自然観察と優れた古典にまなび、現代とは何であるか考えること。創作に方向性をもて」これが平山芸術の軌跡が遺したメッセージである。15歳で被爆し20代は白血球減少に悩んだ体験から、世界平和を中心テーマにした画業であり文化活動であった。今回、手元の「平山郁夫スケッチ集一写生帳・素描・大下図・本画、東京芸術大学芸術資料館刊行」、平山郁夫著「生かされて、生きる」角川文庫平成8年初版によって記憶を確かめた。大きな作品の制作には、先ずアイデアをかためるため文献資料を読み込む。シルクロードの砂漠、砂嵐の中でゴーグルをかけ、異なる服装・姿態の現地人をケッチしている写真が印象的であったが、何千枚も描きためた写生帳は300冊以上。文化財保護活動で現地に行っても、視察・交渉からホテルに帰っても宴席から早々に自室へ戻り、印象の薄れないうちに、と鉛筆を走らせていたという。そんな記録の中から構想にあったスケッチを組み合わせて1枚の下絵をつくる。本画から夥しいスケッチに目を向けた時、これまで知らなかった芸術家の姿が科学者の姿と重なって見えてきたのです。学長職10年（第6代と8代）どんなに忙しく遅く帰宅しても絵筆を執らない日はなかったという。

伊藤整が書齋で膨大な資料を吟味する姿を見て、科学も美術も文学も、仕事の根底は似ていると思った。ここに紹介した二人に共通なのは何であろうか。自らに湧き起こる創作意欲が原動力であるのは確かだと思う。従って、平賀氏の父君に対する解釈《他人の思想の下でこの作品を作ったとは考えない。創造的芸術は湧き起こる力によるものであり、既成の思想を必要とするものではない。父自身の豊かで自由な人間性が作品を作った原動力だと思ふ》は十分に理解し納得できるのです。

平賀洗一氏と関係ない一般論ですが、日本の頭脳明敏な学生や学者はなぜ矛盾を抱えた人間の集合である社会、その現実や実態にしっかり目を向けず、思想や・・・理論に心を奪われ共産主義思想の虜になったのだろうか。言い換えれば、情報操作やデータ隠しを疑って、壮大な社会的実験ではないかという疑問がなぜ出なかったのか。いや、異論を持つと疑われただけで抹殺されることが多かった。1950年に出版されスマートに実情を暴露したベストセラー高杉一郎著「極光のかげに」と、それにつづく多数の体験記はどう読まれたのだろうか。私どもは、混沌とした現実よりは理論や学説に説き伏せられ反論できないまま従ってしまう。ここまできて、脇道にそれるがぜひ書いておきたいことがあります。

原発設置・原発事故と東日本地震災害をめぐる2つのこと。1つは、情報のあり方と我々の姿勢が問われているということ◇TV中継で「国会は一体何をしているのか！」と熱血東大教授・児玉龍彦氏（内科医。分子創薬で世界的な研究者）。「マスコミも学会も機能不全」と一刀両断。国の放射能対策の怠慢をめぐり「満身の怒りを表明します」と国会で声を荒げる。この記録映像は今でもネットでみることができ、ご本人はボランティアとして今も現地の除染活動に毎週末車で通っている。我々は、事実を正しく知って経験則で確かめ考え、実践する地道な努力が足りないと思う。2つめは、利害・価値観の対立する正解のない問題に、地域住民或いは市民として、いかに“合意/理解と納得”に近づく議論をするか。ボストン・東京・仙台・現地で実施して、ジーンと考えさせ深い感銘を与えたM.サンデル教授の白熱授業であり討論の運び方でした。

\*\*\*\*\*

From: ick26473@hb.tp1.jp

Subject: [rokko7:1671] 早速のご返答ありがとうございます。

Date: 2013年4月3日 16:05:33:JST

To: rokko7@freeml.com

Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

平賀壮太様

早速のご返答ありがとうございます。表現にはその表現に至った思想的根拠があるはずだというのが私の思いであり、その根拠を知りたいというのが私の問題でした。

その答えとして、あなたの返答から理解できたことは、「人のやらないことをやる」ということでした。私はその答えをもってすべてを了解いたしました。したがってこれ以上何も言うことはないのですが、あえていえば、それは表現者側の論理として十二分に根拠となる思想であり、哲学であり、行動原理として認めていますので、このことに関して決着いたしました。

しかしここからは問題は別になり、もしかするとあなたには関係ないことになるかもしれませんが。だがこの際、あえて聞いてみたいとおもいます。それというのは、翻って鑑賞者側からすれば、作品に拘束され「人のやらないことをやる」という論理にはおのずから限界があります。表現者と共通した感覚があればその表現は直感的に理解できるでしょうが、作家と鑑賞者との間に距離があると、その距離を埋めるために思案することになる。私が西田だの伊藤整だの名前を出してみたのも、その穴を埋めるための私の側の試行錯誤のひとつであり、したがって、そのなかのだれかの思想に、あなたの父君を結び付けようとしたわけではさらさらない。「既成の思想の中に父の創造的芸術活動の源を探ろうという試みは無意味」だということは言うまでもないことで、問題は鑑賞者・私の側にあるのです。

たとえばピカソについて、その解説をよめば、それはそれなりに理解できる。しかしその作品を見て言葉で理解したほどにはどうしても理解できない。「何だ、これは」という思いに捉われます。以前から芸術に関して「高級な批判には耐えるが、素朴な鑑賞には耐ええない」という言葉が残されている。この表現と鑑賞の距離を芸術家側ではどのように理解しているのだろうか、という問題が私の側に常に去就しているのです。ついながら表現者の側にあるあなたの見解を聞いてみたいと、この際おもいますがいかがなものでしょうか。結局、判らないものは判らなくてもよいのだろうか。縁なき衆生には無縁である、というのが真相なのでしょうか。

4月3日 小林一喜

\*\*\*\*\*

From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1672] 美術鑑賞について  
Date: 2013年4月3日 18:11:36:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜様

メールをありがとうございます。作品と鑑賞者の間の距離についての難しい御質問で、私には上手く答えられないかも知れませんが、ピカソの絵についての私の経験を述べてみます。

私は小学生時代（小学5～6年生）にすでに父が購入した美術雑誌のピカソの絵に魅了されていたのです。形態の面白さ、色彩のハーモニーの美しさ、そして何よりも対象の人物や静物からのエッセンスの取り出し方の巧みさに感激しておりました。特に女性の肖像における多方面から観察したイメージが組み合わせられている絵には歓喜したのです。その一見崩れた形態の画面に美しい女性像が浮びあがっていたのです。勿論小学生の時には、ピカソの絵についての評論など読んだことはありませんでしたが、すでに熱狂的なファンになっていたのです。したがって、私の場合は「素朴な鑑賞」ですすでにピカソの<sup>とりこ</sup>虜になっていたのです。「高級な批判には耐えるが、素朴な鑑賞には耐ええない」などということは私の場合には当てはまりません。

ピカソに限りません。抽象絵画（アブストラクト）を見て「何が描いてあるか分からない」と困惑している鑑賞者は多いと思いますが、そこには何も具体的な物体は描かれていないのですから何が描かれているかなどと悩む必要はありません。色彩のハーモニー、筆使いの面白さを楽しんだらよいのです。それが抽象絵画の楽しみ方です。芸術を理解するには鑑賞者の側の鑑賞姿勢も大切なのでしょう。既成概念を取っ払ってフランクに絵に對峙する姿勢が必要だと思います。

アバンギャルドの作家たちは突出した表現者ですから、それを最初に理解できる人は少数の評論家だけであることは当然なのです。そしてそういう表現者は全ての人に分かってもらおうなどと考えて制作している訳ではありません。

しかし、分からない人は放っとけば良いなどとは、私は思っていない。作品を理解出来るようにと多くの美術関係の教育者が出来る限り努力しているものと思います。多くのファンがいるゴッホやアンリ ルソーも生前は一般には知られていなかったのですから、時が解決する場合も多いと思います。

ご質問に上手く答えられなかったかもしれませんね。

2013年4月3日 平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: ick26473@hb.tp1.jp

Subject: [rokko7:1673] Re: こばやしvs平賀 問答を読んで

Date: 2013年4月3日 22:18:14:JST

To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

岡崎 様

平賀氏と私の対話に参加していただき有り難う。

ところで私はあなたの文章に理解できないところがありましたので確認してみたいと思います。それはあなたが「平賀氏の父君に対する解釈は十分に納得し理解できるのです。」と書いた文章に続いて、あなたは「一般論ですが、日本の頭脳明晰な学生や学者が、なぜにあのように共産主義思想の虜になったのか」と疑問を呈していることは、共産主義に賛同した平賀氏の父君への否定的な意味を込めた文章なのですかと確認したいので、そこがどうも判らないのです。若し平賀氏の父君に対する批判の意味がそこに込められているとするならば私は、それは違うでしょうと言いたいのです。

理由は、戦前、共産主義思想の虜になった人々は、まず天皇制の基盤であった地主・小作関係の理不尽さに怒りを覚えていたということがあげられます。不条理を強いられていた小作農民に同情し、その理不尽さを変革しなければならないと考えたことは正当なことであったはずで、そして日本の政党で、その天皇制の理不尽・不条理さに対峙できたのは共産党しかなかったのです。その他の政党は大政翼賛会で小作の不幸を黙殺していたのです。それに比べれば小作に強いられた理不尽な不幸に同情できた心情の持ち主こそは敬意に価するのではないかと。したがって私は平賀氏の父君には心から敬意を持っています。そのことと共産党が、いろいろ誤りを犯したことが事実であっても、戦前、天皇制に正面きって対峙したことは大政翼賛会になだれこんだその他の政党に比べればましではないかと思うわけです。権力に擦り寄り弱者を黙殺する政党よりましだというのが私の判断です。

さて、伊藤整のことですが、彼は「チャタレイ夫人の恋人」でもって『ワイセツなぜ悪い』と権力に対峙したことを評価しています。権力の上から目線で、下々の人々の『性』を犯罪扱いすることの卑しさに対峙したのです。それはまさに伊藤整の芸術論でいう「秩序に対する生命の批判」だったわけですが、私はそのことを評価したわけですが、そのことと平賀氏の父君の女体の生命力の表現において軍国主義国家秩序に対峙した精神は同じではないかと解釈できるのではないかと言及してみたわけですが、まあ、ざっとそんなわけです。

いずれにせよ参加いただき有り難うございました。

4月3日 小林一喜、

\*\*\*\*\*

From: eokazaki@bj8.so-net.ne.jp  
Subject: [rokko7:1674] Re: こばやしvs平賀 問答を読んで  
Date: 2013年4月4日 0:39:20:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜さま

さっそく疑問を呈して頂きありがとうございます。

純正のマルクス主義・共産主義がどこかで本来の機能を果たしていたのかもしれないが、私が評価したいのは次の一節

『独裁者のスターリン批判で暴かれたソ連式社会主義にも父は幻滅していました。権威的で硬直した冷たいソ連式社会主義は父の理想とは異なるものだったのでしょう。もともとマルクス主義・共産主義は労働者を労働の搾取から解放し、自由な人間性を回復させる思想のはずだったのにソ連は国民を抑圧する国へと変貌してしまっていたのです。』

に表現された医学部一卒業生の生き方です。創造的な芸術活動のほかに、我われの身边には次のような人たちもいるのです。

佐久総合病院の若月俊一氏(1910-2006年、96歳で死去。18歳ころマルクス主義に傾斜。昭和11年東大医学部卒業。入隊、結核発病、除隊。石川県小松市の病院へ出向。論文「工場災害の多発原因の統計学的研究」、昭和17年「某工場における災害の統計的並びに臨床的研究」出版。19年1月治安維持法違反のかどで逮捕、12月釈放。20年3月医師二人の佐久病院へ赴任。以後の活動は皆さんご存知のとおり。黒岩卓夫氏は我々と同年代、昭和12年生れ、6歳で満州へ渡る。敗戦国の難民として各地を流浪。帰国後中学3年まで信州山間地に間借りのランプ生活。松本深志高校をへて東大医学部を卒業、24歳。学部自治会活動から、日本共産党やスターリンのやり方に反抗したニューレフトの学生運動リーダーとして60年安保運動へ。その後、組織の実態に幻滅を感じて去り、徹底した現場主義で医療の新しい局面を拓き、現在、厚生労働省が推進する在宅支援医療にいたる数多くのパイロット役を果たす。元ゆきぐに大和病院長。現在、新しいタイプの総合病院とも言われる萌気園診療所開設(2012年8月20周年記念式では友人として祝辞をのべる)、今年から365日診療制をはじめている。このお二人は、幻滅・挫折など語ることもなくすぐ切り替えて行動し、日本をある面を着実に変えてきたのです。

岡崎悦夫

\*\*\*\*\*

From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1675] 性と権力について  
Date: 2013年4月4日 6:13:10:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜様

[rokko7:1663]で小林さんが伊藤整の芸術論について言及していた意味を[rokko7:1673]の「チャタレイ夫人の恋人」の裁判の文章でようやく理解いたしました。あなたの『秩序に対する生命の批判』という見解に賛成です。

チャタレイ裁判は、人間性の基本である『性』を権力側が抑圧しようとする力を跳ね返す裁判だったわけで、反権力闘争でもあったのですね。アバンギャルドな映画を沢山制作した反権力指向の強い大島渚監督も『愛のコリーダ』を作成して、裁判では「ワイセツの何が悪い」とどうどうと戦い、勝利を納めたのでしたね。

2013年4月4日 平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: ick26473@hb.tpl.jp  
Subject: [rokko7:1676] 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月4日 15:17:14:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

岡崎さん

あなたが佐久総合病院の若月氏そして黒岩卓夫氏の名前を出したのを見て、あなたの真意がよくわかりました。結局お互いに同じではないかという共感の思いです。ただあなたの文章は私にとって錯綜していたから混乱してしまいました。

平賀さん

ピカソの件、あなたはやはり芸術家の<sup>ほんちゆう</sup>範疇にいる人で無知な素人ではないというのが私の判断です。無知な素人である私はやはりピカソの絵は判りません。しかし、ピカソについての言葉での言及はそれとしてわかります。けれども絵と言葉は本質的に世界が異なります。私は、どうやら絵の世界には縁なき衆生の一人であることを甘受せざるを得ないようです。

4月4日 小林一喜

\*\*\*\*\*

From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1677] Re: 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月4日 16:16:57:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: rokko7@freeml.com

小林様 岡崎様 高橋様 飯塚様

『ムカシネマ』の『女性美3部作』を巡ってのメールの交換があり、なかなか面白い日々でした。3人の意見がほぼ一致したのでほっとしております。

作品と鑑賞者の距離をどのようにして接近させたら良いかと言うテーマは未解決ですが、美術の鑑賞の仕方をもっと小学校で教えたら良いのではと考えています。海外では立派な美術館に子供達が大勢見学に来ております。抽象画（アブストラクト）の楽しみ方などは幼児の頃から教えると良いのかもしれませんが。

この話題が一段落したところで、皆さんのメールを時系列順に一つのファイルにまとめて、カラーの表紙をつけて電子図書のスタイルにしてみようかと考えておりますが、いかがでしょうか？そしてそのファイルを『女性美3部作』のDVD化に関与した新潟大学の原田健一教授らにお送りしようかと考えておりますが、構わないでしょうか？

ファイルができれば最初に皆様4人の個人アドレスにお送りしてチェックしていただくと思っています。

平賀壯太

\*\*\*\*\*

From: kazuya@courante.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1678] Re: 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月4日 23:19:11:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

一喜 様

先日からの平賀、小林、岡崎3氏の議論の応酬を興味深く拝見致しました。典型的なノンボリの私には議論の行き着く先に関してはあまり気にしませんでした。私から見る壮太君は、精神は科学者、心は芸術家の人と昔から思っておりました。



またもう一つ思ったことは、畏友樋口良健君が生きていたらこの議論にどんな参加をしたかどうかということでした。繊細でシャイなくせに態度はその正反対の高校時代の彼は私にとって忘れられぬ同期生でした。しかし卒業以後の彼の動静についてはあまりにも不明です。誰かご存知の方がおられましたら差し支えない範囲内で教えて戴きたく書き添えました。

タカハシ（高橋一哉）

\*\*\*\*\*  
From: ick26473@hb.tpl.jp  
Subject: [rokko7:1679] Re: 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月5日 17:08:23:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

高橋一哉 様

あなたの『壮太君は、精神は科学者、心は芸術家の人と昔から思っておりました。』という人物評、さすがに鋭い洞察力、なるほどと得心いたしました。ところで樋口良健君の件、だいぶ早い時期に亡くなられたことは聞いておりますが、その動静は、早い時期からたしかではありませんでした。たぶん遠山英雄君が比較的その消息を知っていたように思います。たしかに彼がいたら、その発言は面白かったらうな、という思いはあります。なにしろ高校当時においてすでに異色の存在であったから。

話し変わって、遠山君に関しては、『放送思い出ばなし—わたしが生きた時代—』というエッセイが、同期、安藤正雄君による 編集・製本 そして我田美福君による表紙・挿絵の共同制作で出版されたことを、差し出がましいが、お知らせしておきたいと思えます。これは遠山、安藤、我田三者あいまっての上出来の作品で甘心致しました。遠山君のNHK報道局時代に担当した番組をかなり見ていたことを知り、いまさらながら彼の活躍ぶりに感心した次第。ついでながらその番組を紹介しておく 「経済展望」 「1億人の経済」 「こんにちは奥さん」 「暮らしの経済」 「現代胸算用」 「報道特集」 「総理と語る」 「選挙関連番組」さらには「ニュースセンター9時」等々です。圧巻ですね。ついでながら彼のメールアドレスは次のごとくです。  
tooyama-h@jade.plala.or.jp です。勝手に記して良いのかな。ごめんなさい。

さて、話変わって岡崎悦夫氏への追伸

先日あなたは内心怒りをもってスターリン主義の虜になった頭脳明晰な学生や学者を批判していました。「日本の頭脳明晰な学生や学者が、なぜその実態を把握しようとせずにあのように共産主義思想の虜になったのか。」と憤怒をこめて言及していました。あの時、私はこのことに一言も触れずに対応してしまったので結論だけを言っておきたいと思いま

す。それは、あなたの憤怒にわたしも全く賛成ということです。しかし、その後、個人的なやり取りで、わたしはすでにスターリン主義批判など、いまさらやる気などさらさらないとあなたに言いました。そして、問題は現在にあると言ったところ、あなたからも賛同をえましたがその理由をあらためて伝えたいと思います。

スターリン主義批判はソ連自身もやっており、フルシチョフ、エリツインという流れの中でソ連は不完全とは言いながら「民主主義」のロシアに変貌してしまいました。それは二度とスターリン主義に戻ることはないという時代の歯止めがかけられたということです。問題は現在にあるという意味は、スターリン主義批判の急先鋒であった「頭脳明晰な学生」が60年安保の直後から、マルクス主義は単なるイデオロギーに過ぎず科学ではないと思い定めて、科学的な経済学を展開しているアメリカへと留学していったことです。つまりマルクス経済学から近代経済学への移行です。それは、わたしにとってソ連がダメならアメリカがあるさ、という軌跡にみえました。その結果はどうなったのか。

アメリカ帰りの経済学者が行ったことは、たとえば小泉・竹中路線という竹中平蔵による近代化・合理化路線。つまり非合理的な弱小企業は国家にとって足手まといになるので滅びてもらい、強者だけが生き残れば、よりいっそうの繁栄の道を行くことができるという政策であった。その結果は、地方の都市のシャッター街への変貌。契約社員の増加と、ホームレスの増加など弱者ほど悲惨な滅びの過程を強いられている現状である。

現在、先進資本主義国は、流れとして産業資本主義から金融資本主義へとおのずから移行しつつある。

そのことが意味することは、金儲けをするにあたって、いちいち工場を建て商品を作って、それを売って儲けるという過程を経るのが産業資本主義であるならば、金融資本主義での儲け方は、たとえば株を安く買って高くなったときに売り抜けるということで儲けるのである。産業資本主義では金融とは産業への投資であったものが、金融資本主義では、それが一攫千金いっかくせんきんの投機ぼくちになったのです。つまり博打になったのです。商品を造って売るという手間ひまかけずに儲けることによって、資本主義的合理化を果たそうとしているのです。さかんにグローバリズムがいわれるのは、その博打の舞台を世界化したいがためなのです。要するに発展途上国こそ株を安く買って高く売り抜ける機会が多いから、そのための舞台を世界に求めたのがグローバリズムにほかならない。

このように見てくると、現在、資本主義という体制が極めて不健全な状態にあることが判ると思う。先進国では資本は物作りのために投資するには躊躇ちゅうちよせざるを得ない状況にある。作れば売れるという時代ではなくなっているし、労賃も高いので産業を維持するには経済的合理性を貫くことが国内では困難になっているのです。イノベーションと言い技術革新をして売ればよいといったところで、客が喜ぶ売れる新商品はそうは簡単にできるものではない。要するに先進資本主義国は軒並みに袋小路に入り込んでいる。その中でアベノミックスの金融政策は金融緩和政策をとり資本をだぶつかせようとしている。それで工場が建ち、人が雇えて商品が生産できるとなれば、めでたしめでたしであろうが、一体何を作り誰に売ろうとしているのか全く不分明です。そのなかで早くも株の値上がりか何に

もまして先行しているのは当然の成り行きです。つまりそのようにしてしばらくは株が儲かる状況が続くのですが、やがてバブルとなって破綻<sup>はたん</sup>すると言うのがこれまでの歴史でした。アベノミックスは、レーガン大統領のレーガノミックスを手本にしていると言われていいる。レーガノミックスでは、余った資本はマネーゲームにまわされ、結局は株価の狂乱をもたらし、それはやがて株価の大暴落となり、「ブラックマンデー」を誘発した。

岡崎さん、わたしはスターリン主義批判など、今更問題にもならないしやる気もないと言いました。そして現在の問題こそが重要であると言ったのはこのような状況を指していたのです。頭脳明晰な学者諸君が過去においてはスターリニズムの虜になって幻想を振りまいた、そして現在、経済のアメリカニズムの虜になって再び幻想を振りまいている。なぜか頭脳明晰な学者諸君の採る知的構図と行動様式はなんと同じではないか。かかる現在性こそが今日の問題性なのです。先日の電話では尽くせなかったことの、これが追伸です。公にして差し支えないことと思ったのであえて表に出しました。悪しからず。

4月5日 小林一喜 (個人の敬称が滅茶苦茶ですね。まあ、悪しからず)

\*\*\*\*\*  
From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1680] Re: 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月5日 21:49:48:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

小林一喜様

『ムカシネマ』から始まった討論はますます面白くなってきましたね。[rokko7:1679]でのあなたの日本の現状分析には同意することが多々あります。私は国際・国内政治には常に興味津々<sup>しんしん</sup>なのですが、この分野では無力なことを自覚しており発言は控えがちになります。金融関係については全く知識がありません。「金融などで儲けようとするな」「国債などに手を出してはならない、戦後は紙くずになってしまった」が子供時代からの父の家訓だったのです。

高橋一哉様

あなたの私に対する人物評には、意表を突かれてびっくりしました。「アッ そう言われれば そうだ」と思ったのです。

岡崎悦夫様

佐久総合病院の若月氏や黒岩卓夫氏についてインターネットで検索して勉強いたしました。素晴らしい人達ですね。

2013年4月5日 平賀壯太

\*\*\*\*\*  
From: mhiguchi@seagreen.ocn.ne.jp  
Subject: [rokko7:1681] Re: 岡崎・平賀氏に対する感想  
Date: 2013年4月5日 22:51:08:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

高橋一哉君、皆さん今晚は、

樋口良健君ですが私も詳しくは伺っておりませんが、「平成22年2月73歳で永眠いたしました」と、我が家とは巻きの関係にある彼の実家のお兄さんから連絡をいただいております。

ではまた 樋口正毅

\*\*\*\*\*  
From: eokazaki@bj8.so-net.ne.jp  
Subject: [rokko7:1682] エネルギー転換  
Date: 2013年4月6日 0:43:08:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

付言： 現在日本に8600の病院がある。1/3が加盟する日本病院学会総会が立川総合病院を学会長とし6月新潟市で開催。私は医薬品副作用被害救済制度を10例余利用したが、医療側が無知なる故に申請されない事例が9割以上。この問題を改善するため発表する。もう一つ。日本の医療統計は誤魔化しが多く国際的に信用されていない。最もいい例が死亡診断の原死因の捉え方である。医学的・社会法律的に重要な死亡診断書が救急外来の忙しい最中に1人の医師によって、同僚監査もなく、発行される。

死亡に至る複雑な病態生理を解析する余裕もなく書く慣習が最大の原因だろう。診療記録と対比する私共の検証作業によって日本で初めて実証された事実で、他の病院に依頼して調査して貰ったが同様な結果であった。厚労省に連絡済み。改善策を導入すると大幅な改善があることも確かめている。

現在・近未来の問題、制度・政策に対する幻滅・不満・憤怒のエネルギーをこんな形で  
転換しています。学会長講演抄録をまとめ終わり少々心の余裕が出来たので記す。

岡崎悦夫

\*\*\*\*\*  
From: hiraga64@grape.plala.or.jp  
Subject: [rokko7:1683] Re: エネルギー転換  
Date: 2013年4月6日 2:02:34:JST  
To: rokko7@freeml.com  
Reply-To: [rokko7@freeml.com](mailto:rokko7@freeml.com)

平賀壯太より

岡崎悦夫様

医学分野でのご活躍、感銘を受けております。

私は「現在・近未来の問題、制度・政策に対する幻滅・不満・憤怒のエネルギー」を油  
絵に転換したり、下記のような講演会の講師をして和らげています。

福島第1原発事故に対する抗議をテーマにした100号(130 x 160cm)の平面3  
点と立体1点を制作しました。「憤怒のエネルギー」を“油”絵に点火するとメラメラと  
燃えあがり、そして、『フクシマ：パンドラ』『フクシマ：怒り』『フクシマ：抗議』『フ  
クシマ：阿修羅』（立体）の福島第1原発4部作が完成しました。

第116回おしゃべりサロン 『私と油絵と蝶と・・・ちょっと風変わりな家庭教育』  
講師：平賀壯太 4月16日 会場：ゆめりあ うじ(宇治市)。沢山の写真や絵・マン  
ガを映写しながら2時間の紙芝居的な漫談をやります。

\*\*\*\*\*

平賀壯太より

皆様へ

平賀洗一の撮影した映画『女性美3部作』を含む9.5mmフィルムは新潟大学人文学部の  
原田健一教授のグループによってDVDに焼き直されて、『地域映像アーカイブ』の映像デー  
タベースとして保管されています。そしてこのDVDの『女性美3部作』には、最近バックミ  
ュージックとして素敵な電子音楽も付けられました。『ムカシネマ』での放映のときには

短時間の映像だけでしたが、この3部作は約42分の作品です。42分間のヌードのオンパレードの映像は圧巻です。

先日（4月26日）、NHK新潟放送局の番組『きらっと新潟』では、昔の新潟県の記録映画の紹介があり、父が1936年に撮影した大雪の六日町の記録映画も放映されました。町の青年たちが企画した雪上の運動会、六日町駅でのロータリー車による線路の除雪の映像でした。

今、新潟大学人文学部の人達によって、『地域映像アーカイブ』の映像データベースを新潟県、新潟市の図書館、博物館などの教育関連施設で見られるようにする作業が進められているそうです。試験的な運用は4月より始める予定だそうです。南魚沼市でも鑑賞できるようになると良いですね。

最後に、父のプライベートフィルムについて以前私が書いた小文を参考として載せておきます。

## 平賀洗一のプライベートフィルム

平賀壯太

平賀家秘蔵の平賀洗一のプライベートフィルムは12巻あります。フランスのパテー社製のカメラで洗一が撮影した9.5mm幅の映画フィルムです。9.5mm幅のフィルムは日本では第2次世界戦争の直前の数年間しか販売されなかった希少なものです。

1935～1938年にかけて家族や家族の行事を撮影したもの、1936年の大雪の六日町での雪上市、屋根の雪降ろし、雪上運動会等の記録です。また粟島の海の漁船上で漁師と一緒に魚釣りをしている洗一の映像などもありました。

その他に女性の裸体美をテーマとした3部作と言える洗一の映像作品があります。私は今までこの3部作については映写して見たことはなく、今回新潟大学人文学部の人たちによってフィルムからDVDに変換されたものを初めて自宅の大型液晶テレビでゆっくりと鑑賞いたしました。

1. 「流れ」1936年（昭和11年）
2. 「海女 へぐら島」1937年（昭和12年）
3. 「光の魚」1938年（昭和13年）

「流れ」は深山の谷川で遊ぶ3人の全裸の女性の映像です。渓谷の煌めく光と暗い影の強いコントラストの中で白い女体の動きを克明に写し撮ったものです。渓谷の樹木に架けたブランコで遊ぶシーン等もあります。撮影場所は六日町五十沢地区の金城山の谷川と推測されます。

「海女 へぐら島」は能登半島の輪島市の沖合50Kmのところにある舳倉島（へぐらじま）の海女を撮影したものです。水が入らないように空気を送り込むゴムのバルブのついた水中眼鏡をつけ、ふんどし一つの多数の海女が水中に潜ったり、岩場で休憩している映像です。ふんどしに鍵型の鉄器をさして、黒光りの精悍な身体で動き回る海女の姿は圧巻です。健康な海女たちのカメラに向かった屈託のない笑顔も印象的です。また海中を泳ぐ魚群の映像もあります。防水ではないカメラでどのようにして水中撮影をおこなったのか、興味のあるところです。

「光の魚」はやはり海女の映像ですが、これは舳倉島ではなく、新潟県村上市の沖合40Kmのところにある粟島（あわしま）の海女ではないかと推測されます。このフィルムでは、海女全員が洗一のデザインしたふんどし（Gストリング）をつけています。それは細い黒い紐に三角巾が付いたもので、三角巾は左右半分が白と黒に分けられた斬新なデザインでした。すなわち、このフィルムは洗一が周到に計画した演出のもとで撮影された作品なのです。

この3部作は、それぞれが特異的な魅力を持つ独立した作品ですが、「女体美の讃歌」と

いう共通のテーマによって統一性が感じられ、ヌードをこれほどまで徹底して撮影したことには強い感銘を受けます。夾雑物のない全編ヌードオンパレードのこの3部作を連続して鑑賞していると、そこに作者の一貫した強靱で圧倒的な意志が感じられます。私が子供のときに洗一が口癖のように私に言っていた言葉は、「人の真似をするな。人のしないことをしろ」ということでした。それは芸術や科学の世界で重要視される「オリジナリティのある仕事」をしろということだったと思います。しかし、こういう言葉は、自分がオリジナリティのあることを実際にやったという自負がなければ、自分の子供にさえとても言えるものではありません。洗一のこの言葉がでてくる中核にはこれらの作品群の制作があったのだと、今回洗一フィルムのDVDを見ていて気付いたのでした。

洗一は仙台市で第2高等学校・東北帝国大学医学部の学生だった時には、社会主義運動に参加していました。しかし1928年、洗一が医学部を卒業する寸前に、全国で1,568人の共産党員と支持者が一斉検挙された3.15事件があり、無産者新聞の配達を行っていた洗一も逮捕されて取り調べを受けたのです。このような日本政府による激しい弾圧によって、日本における社会主義運動・労働運動・反戦運動は完全に息の根を止められてしまったのです。その後、1928～1931年に北海道旭川市の病院に勤務し、1931年に六日町で平賀医院を開業してから終戦後日本共産党に入党して1946年3月15日六日町細胞（六日町支部）を立ち上げ活躍を始めるまでは目につくような政治運動はしていません。しかし当時、戦争には反対だったでしょうし、時の政治には批判的であったはずで、この女性美3部作は、日本軍が1937年盧溝橋事件で中国に侵略戦争をしかけて、1939年第2次世界大戦へとなだれ込んでいった激動の暗い時代に撮影されたものです。そのような戦時色一色の時勢にヌード撮影をしていたということ自体が、洗一が時流に流されない強い批判精神を持っていて、権力への反骨精神で精一杯抵抗していた表れではないかと考えられます。撮影時におけるこのような社会的な背景を思慮すると、この3部作はまた別な深い色調の光芒を放つのでした。

(2009年3月15日記)

<注>平賀壯太：1936年六日町に生まれる。平賀洗一の次男。元熊本大学教授。